

異端の曲がり角

大島 勉

桜社十新宿文化提携公演の『盲導犬』は、期待にたがわず、最近での出色の舞台となった。期待にたがわずと書いたが、あるいは期待をいくぶん上廻ったと言ってもいい。ただし、より正確に言えば、こうした期待を抱かせ、また感銘をあたえてくれた大部分は、唐十郎の戯曲というよりは、蜷川幸雄の演出手腕であったように思う。少なくとも私としては、そうとしか言いようがない。これまで、この同じアートシアターの狭い舞台で四本の清水邦夫作品をとり上げ、いずれも水準をはるかに抜く舞台づくりを見せた蜷川幸雄が、はじめて取り組む唐十郎作品にどのような斬新なイメージを羽ばたかせるか、これまで早稲田小劇場での『少女仮面』を唯一の例外として状況劇場から門外不出のおもむきのあった唐作品にどんなスタイルを植えこむかに最大の興味があったわけだが、その結果は半ば予想したとおり、彼のイメージの浸透力の力強さをあらためて立証するものであった。いずれにせよ、蜷川幸雄は唐十郎の文体に呪縛されることなく、やや不安の色はのぞかせながらも、それを押しかえし撥ねかえし、自己の演出のイメージを通貫させた。最近でもっとも力の入った、時間のかかった一番である。蜷川幸雄のうん

ん唸るような声が舞台のあちこちから聞こえてくるような気がしたが、とにかく第一回のねじ伏せには成功した。彼のように、借り物でない独自のイメージをもち、計算され尽くした局面の展開で観るものをおどろかせてくれる演出家は、当節ほんとうにめずらしい。新劇界にいぜんとして支配的な教養主義と教条主義から、彼ほどいま自由な位置にある演出家はいないのでないか。いい意味での、したがって真の演劇的意味におけるケレンまで含めて、彼ほどいわゆる見せる舞台の図柄と躍動のリズムをあたえてくれる演出家は、ほかにとんと知らない。いまさら言うのもおかしいが、まぎれもない演劇的才能の出現であったのだ。

唐十郎の戯曲は、つまるところ、コントとアジテーションの芝居だと思ふ。コントという意味は、ストリップのつなぎに使われるコントといってもいいし、モーパッサン流のコントといってもいい。アジテーションというのは、革命志向の政治的アジテーションの意味にとっても、あるいは小市民的俗物性にたいする底意地のわるい挑発の意味にとってもかまわない。要するに、全体は、そうした色とりどりのコントのシークエンスからなっているし、それをつなぐ

役目として、ぶちかますようなアジテーションが要所要所に入る。

これは実際、うまい手である。いわゆる見せ場としての一つの局面がイメージされると、それに合わせて一種の掛け合い漫才の呼吸とテクニクでとめどもなくことばをつづっていき、一発アジテーションでしめくくったところで、つぎにはっと別のイメージされた局面にのりかえて、また同巧異曲の掛け合いをつづけていく。むろん、幕切れの大芝居にそなえてアジテーションは順を追って増幅されていくが、だからといって人物たちの行動の線がそれによってふくらみ、深さを増していくといった体物ではない。したがって、清水邦夫とちがつて戯曲としての凝集力や一貫した持続性にははなはだしく欠ける代わりに、観客のイメージをとめどもなくあちこちの次元にさまよわせ、またそれらを瞬間のうちに斬りおとし、あげくはお尻に一発ぶちこまれて、つぎへとせき立てられる面白さがある。要するに高尚なテーマを期待して一所懸命分析したところで、そんなものはその分析する人の知能程度によって出てくるかもしれないし、出てこないかもしれないし、確実に徒労に終わるにちがいないし、もしそんな暇があるのだったら、目の前をめまぐるしく飛び交う一見高踏、あるいは一見猥雑な唐十郎のことばとレトリックのアマルガムのおもしろさをただ眺めていればいいのだ。その点では、唐十郎はまぎれもない才能だからだ。したり顔でテーマらしきものを探し出したところで、どうせ損をするに決まっている。いいかえれば、よくいう批評に値しないとか批評の対象にならないとかいうことではなくて、唐十郎の戯曲ははじめから批評を拒否するところから出発している。批評の対象とするからには、一応のもっともらしい恰好をもたさなければ納まりがつかないが、彼の

戯曲にはいかなる批評の論理と生理にたいしても、アカンベエをして後足で泥をひっかけた消えてしまうような体質があり、結局はいたくこちらの自尊心をなぶられるだけである。あるいは唐の戯曲は、弱者の開き直った武装なのかもしれない。

だが、『盲導犬』のなかから嗅ぎとることのできる唐十郎の体臭のようなものはある。それはおそらくは論理や思考といった手段ではこぼれ落ちてしまう何物かであるが、全体を追って嗅ぎまわらううちにどうやら探りあてることのできるものであり、あるいはこの作品の雰囲気を一貫してささえている情念といえるものである。それは、初期のころにはおそらく当の本人にさえ自覚しなかった何物かであったかもしれないが、最近の『ベンガルの虎』や『盲導犬』でようやくある種の輪郭をもちはじめた、一つの情念の体系のようなものといえるだろう。それは何か。

私の嗅ぎあてたところ、それはある権力の闇に沈んだすがたである。カール・シュミットの卓抜な比喻を借りれば、「私的な司祭」として宇宙の森羅万象を見ようとするひとりの人間のすがたである。いいかえれば、ことばの本源的意味におけるロマン主義者としての唐十郎のすがたである。はじめのころの悪ふざけのイロニーが減退してゆき、どこか国士的な生真面目さが、ある種の苦渋と韜晦とを秘めながら、このところかなり明確な輪郭をおびてきつつあるのを、私はある種の無気味さとともに感ぜずにはいられない。これはたとえば大島渚の最近の映画などからもするどく感じとられる、何か不安の徴候をはらんだ、やりきれないような情念とともにたわる何かである。右とも左ともはつきり弁別はできない暗闇の底から、じっと眼をこらして権力のありかをうかがっているような、そ

の権力へのネガティブなコンプレックスをバネにして表舞台にのりだす機を、文字どおり虎視眈眈とねらっているひとりの飢えたような男のすがたが、どうしても目にかんできるといふ。実際、私が『盲導犬』を一読して即座に思いうかべたのは、戦時中の子供のころ読んだ南洋一郎の南洋冒険小説であり、大塚の駅前あたりを夜分酒気をおびて「大東亜の曙を……」と大川周明の一節を吟じながら我が物顔に闊歩する坊主頭の青年たちのすがたである。これは正直な感想である。南洋一郎は南進し、山中峯太郎は北進した。これがたんなる今日の流行の意匠にすぎないのであれば、さいわいである。『盲導犬』がそうした、昭和四十年代の国家主義的再編成の気運にのった逆行的な政治講談の一種でなければ、さいわいである。だが、盲人の影破里夫（この名前の何と象徴的なことか……）が探してもとめるファキイル——貪欲なるものという意味をもち、こわい、真黒の毛並みをもつ狼の血をひくケモノ、ついには銀杏あるいはトハに躍りかかってくるど笛をかみ切る猛犬がはたして何をあらわしているかは、この作品に少しでも触れようとする場合、片隅に投げだ

して済む問題ではあるまい。幕切れ近く、盲導大研修所の先生の言う、「ここは暗い海だよ。トハ！ 私とおまえだけなんだよ。ごらんよ、銀杏、私たちは人々を通う航路から離れて今、南の海をカニの横這いになって進んでいるんだ。分るかい。いつかトハが射つた弾が私の頭を射ち抜いて私の国に向っている。そしておまえの射つた幻の弾もそれにお返しをするように南に向っている。それが同じ航路をたどるものだから、弾がはじけてそこにもえるものが犬の毛さ。そのうち、風の間隙に間にゆれる犬の毛が一齋に燃えだして、私たちと同じような旅人が一斉に私たちの後を追うだろう。そうなんだよ。きつとそうなる。そうしたら私たちはもう一つも寂しくないんだよ。」ということば、——さらに、まさしく幕切れで炎をあげたバーナを手にした破里夫の言う「待ってるよ、ファキイル、これを焼ききる時、俺たちはおまえと一緒にダツタンを越え、ペルシャを越え、ナイルを逆のぼるんだ！」ということばには、南方雄飛の夢にとり憑かれた国士・唐十郎の真情が吐露されているといつて、本人は不名誉に思わないだろう。これは疑いもなく、りつぱな政治的

明日からのレポートⅠⅡⅢ

劇団 暫

向島三四郎 知念正文 平田 満

斎藤公一 岩間多佳子 島崎武典

つかこうへい

Ⅱ郵便屋さんちよつと、改訂版

6月23↓26日

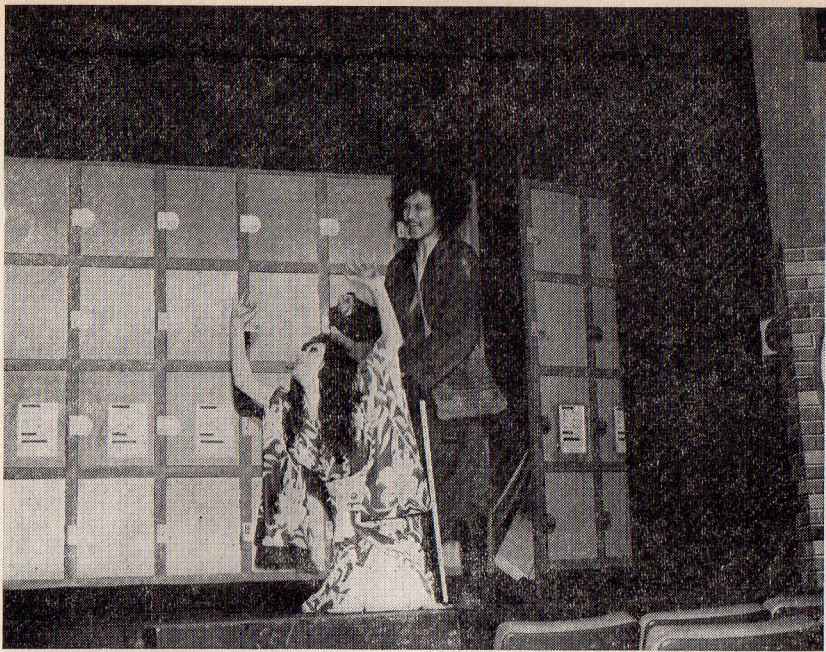
Ⅲ初級革命講座「飛龍伝」

6月27↓30日

Ⅰ戦争で死ねなかつたお父さんのために

7月1↓4日

所 早稲田小劇場 時 7時 ¥300 三本通し ¥500



アジテーションの芝居である。頭のわるい自民党のタカ派代議士たちや大企業の首脳たちなら早速仲よく、目をほそめ、ふところに手をさし込みながら歩みよつてにちがいないであろう青年団の演説会の延長である。トハという女は、かつて新聞紙上をにぎわせた日本の商社マンをキャバレーで射殺したタイの女と同じ設定である。どう言いくるめようと、どんな逆説を弄しようとも、この幕切れのアジテーションは、今日の最右翼に位置する人びとの主張とすれすれのところでつながつている。たかが芝居、ということはこの場合の口実とはならない。唐十郎ははたして、演劇界の宮崎滔天か村岡伊平治か、南洋一郎か保田興重郎か、はたまた林房雄か出口王仁三郎か……。この時代同様、唐十郎の曲がり角ではないか。

私はこの戯曲を状況劇場の舞台で見ないでたすかっと思う。なぜなら、赤テントのなかではこうしたアジテーションの歯止めがきかず、とめどもなく増幅されて大見得の連続となつてしまい、——そこにまた今日大受けに受けている原因があると思うが、ナルシズムの埃りにまみれたすがたがさらけ出されるからである。だが、蛭川幸雄演出の桜社の舞台からは、いまのべたような唐十郎の戯曲にうっ屈した暗い情念のよどみや、とりわけ国家主義的な南進論に つんのめりそうな作品のモチーフにたいする演出者の明確な解答は出てこなかつたにもかかわらず、それゆえにかえってアジテーションの政治的部分が削ぎおとされて、演劇的な効果にとつて代られている。活字で戯曲を読んだときは、おそらくは状況の舞台から想像されるものとはかなりの距離があり、きれいに蛭川幸雄のイメージとスタイルにまとめられて差し出されていた点をまず評価したい。いずれにせよ、断続的なコントのシークエンスが一貫して流れ

だし、アジテーションが結節点の役目をはたして劇的な効果を生みだしていった。むろん、清水邦夫作品にみられるような内面の凝集度や情念のたかまりもないが、おそらくは清水作品に要した時間の倍は費したと思われる緻密な計算とイメージの配分によって、鈴木忠志の『少女仮面』演出とはまたちがった視角から、唐十郎に一つの新しいスタイルをあたえた意味は大きいと思う。とくに幕あきの数分間の勝負は、いつもながら見事というほかない。幕切れ近く、ベートーヴェンの第九シンフォニーの歓喜の合唱のコーダを使ってのダイナミックな、視覚的にも圧倒的なひろがりを見せる演出処理は、思わず唸らされるほどの巧さであった。これは大部分、演出によって見せた舞台である。演技陣では、石橋蓮司、蟹江敬三の常連が相変わらず見えるが、とりわけ校長になった西村克己が若さに似合わないユニークなキャラクターで、悪達者の一步手前といった巧さを見せてくれた。この人は体が重いようで、一瞬おどろくほどの軽妙さを見せる役者だ。これからの活躍を期待させる新人である。緑魔子はどこか、疲れすぎていたようだ。

順序が逆になったが、新しく西麻布のバス停前のビルの地下にオープンした西麻布クリエイティブスタジオ（NCS）の第一回公演『謎の下宿公園——口笛仁義極楽篇』には、やや興冷めした。作・演出の中島紘一という人は映画界の人、もちろん演劇界初のお目見得であるが、この舞台にあらわれたかぎりでは、どこといって新味はない。ジュンというギター好きの若者（林ゆたか）と、殺し屋風の男（江原真二郎）、それに幻の女（吉行和子）の三人が織りなす、戦中・戦後の悪夢と現実の入りまじった荒唐した風景がつぎつぎと展開されていくが、作者が苦心のうちに三等分したのであろう人物へのやさしい心情はどうか伝わってきても、プロットの展開や演出の処理のしかたがあまりにもとおり一遍のアンングラ調から抜けだしていないため、ひどく薄っぺらな印象しかのこらないのである。『上海婦りのリル』や小林旭の渡り鳥シリーズの感傷とパロディも、吉行和子の慰安会の余興のような踊りの愛嬌をのぞけば、どうしても取って付けた恰好になってしまった。むしろ見せ場は、江原と林の

かく王とその一団

本年最大のロマン悲喜劇

役者 花房鉄也・ミイラユキ・御所園丸他 (463)0961

6月15・16・17日 渋谷ブルチネラ

6月24日・7月1日 新宿カルメン

開演夜6時半 (356)4038

(16・17日マチネあり昼一時半)

前売500円 当日600円

前売扱い 新宿駅ビルチケットビューロー

予約問い合わせ 044・94・5016
池袋西武赤木屋

ヌヤド

大道見世物語

あの憧れの
アンドロギュヌスが
唄い踊り叫ぶ!!